

韓国で1日まで開かれた途上国援助をめぐる国際会議で、中国やインドなど新興国が、初めて援助供与国としての責任を受け入れる意思表示をした。世界銀行のスリ・ムルヤニ専務理事と国連開発計画（UNDP）のクラーク総裁にその意義などを聞いた。

中印も途上国支援へ 意義を2氏に聞く

「新興国は経験が強み」



援助を出す側と受け取る側の関係が変わりつつある。伝統的には先生と生徒、親子の関係になぞらえてきたが、今は対等なパートナーとし

世界銀行

スリ・ムルヤニ専務理事

の協力に姿を変えている。かつて途上国だった新興国の強みは（途上国と）知識や経験を共有できる点にある。似たような条件があるからだ。ただ課題もある。新興国は、途上国だった時は援助を受ける際に伴う条件をできるだけ緩くすることを求めてきた。だが支援する側に転じると、自国の納税者への説明責任が生

じる。それゆえ持続性や環境配慮、透明性など、これまで先進国が共有してきた基準に従わざるを得なくなる。政府の途上国援助（ODA）は1960年代や70年代には途上国に流れる資金の7割を占めたが、今や13%に過ぎない。それゆえ新たな職を生む企業など民間セクターの重要性が増している。一方でこうした資金が届かない貧困国も少なくない。また、援助は投資などの触媒の役割を果たす。（聞き手・藤谷健一＝釜山）

「今後の突破口になる」



今回初めて、途上国がほかの途上国を支援する「南南協力」の拡大を盛り込んだ文書を探取できた。タフな交渉だったが、中国も含めて合意

国連開発計画

ヘレン・クラーク総裁

に至った。今後の突破口になる内容だ。一方、途上国の仕組みに沿った開発、そして技術移転について踏み込みたかった。開発は細かいことの積み重ねだ。途上国でも60〜70%の人は、（都市の経済成長の恩恵にあずかれない）農村部に住んでいる。国内総生産（GDP）を高めるだけでは不十分。彼らが蓄えをし、電力な

だ。どのエネルギーを利用する機会を増やさねばならない。経済が低迷する時期だからこそ、先進国にとっても途上国援助は決定的に重要だ。例えば日本は高齢化と人口減少が進み、増加する中間層の市場は海外にしかない。（日本が援助を続けてきた）中国は今日本にとって最大の市場でしょう。日本は東南アジアへの援助に力を入れ、投資も進めてきた結果成功した。これからはアフリカにも目を向けるべきだ。（聞き手・渡辺淳基）